

Desi 概念の成立 Desinamamala に至る背景

著者	山畑 倫志
雑誌名	論集
巻	36
発行年	2009-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130295

Deśi 概念の成立

—— *Deśināmamālā* に至る背景 ——

山 畑 倫 志

0. はじめに

元来、古典時代のインドにおいては著作の際に複数の言語を意識的に併用することはあまり見られなかったが、サンスクリット以外の言語が文語化していくにつれ、文学作品を中心に言語の併用が増えていった。そのため文章語が単一の言語である場合には起こらなかった問題が生じてきた。実際に日常で使用される言語はインドの諸地方それぞれで異なるため、文章語には規範の統一が不可欠である。サンスクリットなど単一の言語を用いる場合にはその規範も単一のもので用をなすが、複数の言語が同時に使用される場合、それぞれに対して規範を定めることが必要となる。つまり文章語として運用するためのマニュアルが必要となるのである。

古典期以降の文法家たちは既存の作品の後追いではあるが、それら中期インド諸語を分類し、規範化することに力を注いだ¹。ただ、それはあくまでも既に規範化されたサンスクリットの記述に付け加える形で現れてくる。具体的にはサンスクリット語の形態にいかなる操作を加えればプラークリット諸語の形態が導き出されるかという規則の集合となって現れる。Vararuci の *Prākṛtaprakāśa* や Hemaçandra の *Siddhahemaśabdānuśāsana* をはじめ全てがそういった形式で作られている。

それによりプラークリット諸語を「地方の言葉」という意味で *deśi* と呼ぶようになり²、さらに多数の言語を *bhāṣā*, *vibhāṣā*, *apabhraṃśa*, *paśācī* というカテゴリーに分類して扱うようになる。この場合の *deśi* は諸言語のカテゴリーの一つであり、語彙を区分する用語ではない。

1 山畑 (2006)

2 Bharata の *Nāṭyaśāstra* 17.3では語彙ではなく言語の分類として *saṃānaśabda*, *vibhraṣṭa*, *deśimata* があげられている。

1. 語彙の区分

近代インド諸語の語彙は伝統的にその由来に従って tatsama, tadbhava, deśi (deśya, deśaja と同) の三つに分類される³。tatsama は古典サンスクリットの語形をそのまま残しているもの、tadbhava はサンスクリットからの語彙からの変化が類推できるもの、そして deśi はサンスクリット以外を由来、もしくは由来不明のものとされている。この区分はサンスクリット以外の言語が文章語となり、それによって具体的な例を伴った言語の変化の認識、そしてプラークリット諸語やアバプランシャに直接流入してくるサンスクリット語彙といった状況からこういった区分が成立していったものと思われる。

2. deśi 概念の成立過程

deśi の概念が具体化していく過程は当時の文法家や詩論家の記述から追うことが可能である。独立した語彙集が現存している Dhanapāla と Hemacandra の二名を本稿では取り上げるが、その他の文法書にもプラークリットの語彙例が含まれていることが多く、Hemacandra 以降はより整理が進む。

まずは上二名を掲げてそれぞれの記述を見ていく。プラークリットの文法家は、Hemacandra 以降で時代的に区切ると西インドを中心としたグループと東インドを中心としたグループに分けることができるため、それも付記した。

- *Kāvyaadarśa*, Daṇḍin, 六～七世紀
- *Kāvyaḷamkāra*, Rudraṭa, 九～十世紀
- *Pāialacchīnāmamālā*, Dhanapāla, 十世紀, 西部
- *Deśīnāmamālā*, Hemacandra, 十二世紀, 西部
- *Prākṛtakāmadhenu*, Laṅkeśvara, 年代不明, 東部
- *Prākṛtānuśāsana*, Trivikramadeva, 十三世紀, 西部
- *Śadbhāṣacandrikā*, Lakṣmīdhara, 十六世紀, 西部

Kāvyaadarśa

以下の記述には語彙の三分と同等の語が出ているが、ここでの意味は

3 さらに近世ペルシャ語やアラビア語、英語などより後代に流入した語彙を *videśi* と呼ぶ。

プラークリット諸言語の分類を指し、語彙の分類を指してはいない。

saṃskṛtaṃ nāma daivī vāg anvākhyātā maharṣibhiḥ /

tadbhavas tatsamo deśīty anekaḥ prākṛtakramaḥ // 1. 33

サンスクリットとは大仙たちによって語られる神的な言語である
tadbhava, tatsama, deśī というのがたくさんあるプラークリットのカテ
ゴリーである。

Kāvyālaṃkāra

ここでは deśya という語彙のカテゴリーの特徴を端的に示している。

prakṛtipratyayamūlā vyutpattir nāsti yasya deśyasya / 4. 27

語根や接辞に基づいて派生することのないものを deśya という。

Prākṛtakāmadhenu

これは東部グループのものである。このグループには他に Kramadīśvara (十～十一世紀), Puruṣottama (十二世紀), Mārkaṇḍeya (十六世紀), Rāmaśarman (十七世紀) が挙げられる。後述する Mārkaṇḍeya を除けば、このグループは語彙区分への言及がほとんど見られない。Lañkeśvara の以下の記述もおそらくは語彙ではなく言語の区分について述べていると思われる。

deśarucyā pratītānāṃ tadbhavānāṃ nigadyate /

lakṣaṇaṃ neha yat siddhaṃ tatsamaṃ deśajaṃ ca tat // 3. 冒頭部

それ(＝サンスクリット)から生じたとして認められているものは地方を照らすと呼ばれる。それ(＝サンスクリット)と同じ特徴を持たないものは deśaja と呼ばれる。

Prākṛtānuśāsana⁴

作者の Trivkramadeva は Hemacandra よりも後代の人間である。Hemacandra の言及しない deśī 語彙を加え、また以下の詩節に挙げるような六つのカテゴリーに分類した。I～V は対応する語の間で形式的な類似

4 deśī に言及する箇所については Vaidya (1954) Intro. pp.36–37 に従う。

などが見られるが、tadbhava とする条件に欠けているものであり、VIがサンスクリットとの関係の見いだせない類の語彙である。

I. vā puāyyādyāḥ / 1. 2. 109

puāī ity ādaya śabdāḥ svarādyādeśaviśeṣitā vā nipātyante /

puāī piśāca unmatas ca /

puāī などは母音などがある代替物と入れ替わった語となったものである。puāī は piśāca, あるいは「狂った」の意味を持つ。

II. goṇādyāḥ / 1. 3. 105

goṇādayaḥ śabdā anukta prakṛtipratyaya loṇāpāgamavarṇavikārā bahulaṃ

nipātyante / goṇo gauḥ /

goṇa などは起源となる語や接辞の消失や加音, 文字の取り違えなどを有する語となったものである。goṇo は「牛」である。

III. gahīādyāḥ / 1. 4. 121

gahīā ity ādi śabdā nirvacanagocarā nipātyante /

gahīā kāmyamānā grāhyā kāmyamānatvāt /

gahīā などは語源論の対象となる語となったものである。

gahīā とは望んでいる女性であるので, grāhyā であると言える。

IV. varaittagāḥ ṭṇādyaiḥ / 2. 1. 30

varaitta ity ādayaḥ ṭṇādi pratyayaḥ sahitāḥ svarādyādeśaviśeṣitā bahulaṃ

nipātyante / varaitto varayitṛkaḥ nūtanavaraḥ /

varaitta などは多くが接辞 ṭṇ などをもなって母音などがある代替物と入れ替わった語となったものである。

varaitta は若い夫の意味である varayitṛka からきている。

V. apuṇṇagāḥ ktena / 3. 1. 132

apuṇṇādayaḥ śabdāḥ kta pratyayena saha nipātyante /

apuṇṇaṃ ākrāntam /

apuṇṇa などは接辞 ta をともなってできた語である。
apuṇṇa は近づくの意味を持つ。

VI. jhāḍagās tu deśyāḥ siddhāḥ / 3. 4. 72

jhāḍādayaḥ śabdādeśyā deśaviśeṣavyavahārād upalabhyamānāḥ siddhā
niṣpannāḥ prasiddhā vā veditavyāḥ /
jhāḍaṃ latādigahanam /

jhāḍa は deśya として成立する。

jhāḍa などはある（正規の）語の代替としてある特定の地方の言語
慣習に従って得られるものとして成立，あるいは（その地方の言語
慣習から）変化して成立したものと理解すべきである。jhāḍa はツ
タなどでたどり着きたい場所のことである。

Ṣaḍbhāṣācandrikā

上記 Trivikramadeva よりもさらに遅く十六世紀に書かれたものであるが、
既に規定された varaittā, goṇa, gahiā, puāyya の四つのカテゴリーのみが
残っており、それらを nipāta としてまとめている。

3. *Pāialacchīnāmamālā*

後述する Hemacandra が引用するプラークリット語の語彙集のうち、唯一現
存するのが Dhanapāla によって十世紀に著された *Pāialacchīmāmamālā*
(*Prākṛtalakṣmīnāmamālā*) である⁵。この作品は総詩節数279と比較的規模が小
さく、註釈も存在しない。プラークリットと同義語を並べていくというスタイル
をとっており、その配置に基準は見いだせない。この作品はプラークリット
の語彙集であり、deśi のそれではない。そのため、tatsama, tadbhava と見るの
が妥当な語が大部分を占める。また Hemacandra は本書を幾度か参照している
が、その記述と一致しないものもいくつかある。本書は以下のようなスタイル
で記述される。

5 Pischel (1900) pp.37–38, § 35.

roro akimcaṇo duvviho dariddo ya duggao nisso / 「貧しい」の同義語
 sattū arī amitto riū arāi ya paḍivakkho // 35 「敵」の同義語

Hemacandra が参照先として挙げている語彙集の著作者は Dhanapāla だけではない⁶。それは Abhimānacihna, Gopāla, Devarāja, Droṇa, Dhanapāla, Pādaliptācārya, Rāhulaka, Śīlāṅka の八名であるが、そのうち作品が現存するのは Dhanapāla のものだけである。ただ、この作品を見て言えることは語彙の区分に関しては Hemacandra と比較してかなり素朴であり、起源を追う、もしくは性質ごとに分類するといった発想はまだ現れていないと言える。

4. Hemacandra と *Deśināmamālā*⁷

Hemacandra (1089–1172) は現在のグジャラートに当たる地域の王であった Kumārapāla に仕えたジャイナ教徒の学者である。彼は中期インド語の一つであるアパブランシャの規範となる文典を著し、アパブランシャの文語化に寄与した人物である。また彼自身もサンスクリットおよびアパブランシャによってジャイナ教説話をいくつか著している。

それら諸作品の中でも中期インド語の文語化への寄与という点で重要なものは次の三点である。

- *Siddhahemaśabdānuśāsana* (第一～七巻がサンスクリット文法、第八巻がプラークリットおよびアパブランシャの文法)
- *Chando'nuśāsana* (韻律の集成)
- *Deśināmamālā* (deśi 語彙の集成)

またサンスクリットではあるが、語彙集の分野では次の三点がある。

- *Abhidhānacintāmaṇi* (同義語の集成)
- *Anekārthasaṃgraha* (同音異義語の集成)
- *Nighaṇṭuśeṣa* (植物用語の集成)

6 Pischel (1989) pp.12–14.

7 テキスト中に実際に見られるタイトルは *rayaṇāvali* である。

ia rayaṇāvaliṇāmo deśisaddhāṇa saṃgaho eso /

vāyaraṇasesaleso raio sirihemacandamuṇivaiṇā // 8. 77

さて、これらの作品はサンスクリットを含め、母語ではない言語を著作のための言語として用いるためにまとめたものであることは明らかである。文法は当時の主な文語を一書にまとめたものであるが、Vararuci の *Prākṛtaprakāśa* 以来、想定される読者は当然サンスクリットを把握しているものとされているため、いかにサンスクリットから各種プラークリットに変換するかという書き方になる。語彙についてもサンスクリット起源と想定しうるのはサンスクリットからの変換、すなわち *tadbhava* として処理できるが、それ以外の語彙はそういった変換規則では処理しきれない。そのためそれ以外の語彙を *deśi* としてカテゴライズし、語彙集としてまとめる作業が必要となる。それまでは多分に慣習的であった語彙の選択の基準が *Deśināmamālā* において明確化されたのである。

Bhayani は *Deśināmamālā* の基準を次の5点にまとめている⁸。

- Mahārāṣṭra のような諸地域で日常的に使用される言語の語彙は取り上げない。
- 相当古くから伝承されてきたものだけを取り上げる。
- それらの語のうち、語根と接辞に分解不能であり、プラークリット諸語文法で定めた変換規則によっても解釈できないもの。
- 標準的なサンスクリットの語彙集に掲載されていない語は変換によってサンスクリットの語彙と解釈できる場合で *deśi* とする。
- 語の意味が対応するサンスクリット語彙の意味から類推可能な場合、その語は取り上げない。

これらの基準に基づき語彙を収集しているため、*tadbhava* と見なしうる語も *deśi* として収録していることがままある。プラークリット諸語による作文にとっての有用性が第一であるため、基準の明確さを重視したものと考えられる。

Hemacandra は *deśi* を次のように定義している。

je lakkhaṇe ṇa siddhā ṇa pasiddhā sakkayāhihāṇesu /
 ṇa je gaṇalakkhaṇāsattisaṃbhavā te iha ṇibaddhā // 1. 3

8 Bhayani (1988) p.163.

desavisesapasiddhī bhannamāṇā aṇaṃtayā huṃti /

tamhā aṇāipāiyapayaṭṭabhāsāvisesao deśī // 1. 4

「その文典に基づいても成立せず，サンスクリット語の語彙集においても見出されない。また比喩という特徴に基づいて生じたのではないものをここで取り上げる。諸地方に広まっていていつの頃からか使われているものを」

具体的な記述例をあげる。

gāme saṅghe ūro jimbhiapajjāulesu ūsattho /

ūsaviṃ ubbhante tahea uddhīkae hoi // 1. 143

ūro は gāma (村) や saṅgha (集落) に対応する。

ūsatho は jimbhia (開いた) や pajja (?) や āula (開いた) に対応する。

ūsaviṃ は ubbhanta (上げる) や uddhīkaa (上げる) に対応する。

また Ramanuja が示しているように⁹，Hemacandra の判断にも根拠の不明なものがある。

ex.

halua / laghuka ○

aiḥārā / acirābhā ×

5. 語彙の分類と言語の分類

Hemacandra より後代の十六世紀の文法家 Mārkaṇḍeya はその著書 *Prākṛtasarvasva* の冒頭においてこう述べている。

prakṛtiḥ saṃskṛtaṃ tatra bhavaṃ prakṛtaṃ ucyate /

tadbhavaṃ tatsamaṃ ceti dvedhā deśyaṃ ca kecana // *Prākṛtasarvasva* 1. 1.

「その起源がサンスクリットから生じたもの(＝語)をプラークリットと呼ぶ。(それには) tadbhava と tatsama の二種があり，また別にいくつかの deśya というものがある。

tadbhavaṃ tatra saṃskṛte bhavaṃ lakṣaṇavaśād rūpāntaraprāptaṃ
rukḥhagharaperamṭādi / tatsamaṃ taralatraṅgamantharādi //

9 Pischel (1900) p.7. § 8

lakṣaṇair asiddhaṃ tat taddeśaprasiddhaṃ mahākaviprayuktaṃ
 laḍahapeṭṭatokkhādi / yad āha bhojadevaḥ deśe deśe narendrāṇaṃ janānāṃ ca
 svake svake / bhaṅgyā pravartate yasmāt tasmād deśyaṃ nigadyate //

「tadbhava とはサンスクリットにおける語彙が変換の規則に従って別の形式を得たものを言う。例えば rukṣa や ghara や peramta など。tatsama は tarala や traṅga や manthar (のようにサンスクリットに同形式が存在するもの) である。変換の規則によって導き出されず、特定の地域で成立するが、偉大な詩人が用いた laḍaha や peṭṭa や tokkha (を deśya と呼ぶ)。Bhojadeva¹⁰ はこう言っている。王たち (の言語) は地方ごとに、また人民 (の言語) は個々に、迂遠な形で通用している。それゆえ deśya と呼ぶのである」彼は東部のグループに属するが、語彙についての解説をしている。

さて、上記で引用したなかにもいくつか例があったが、deśī, deśya という言葉には「サンスクリットとの対応を見いだせない語彙」の意味に加えて、「サンスクリット以外の地方語」の意味も含まれている。そこで文法家たちの地方語についての言及を以下にまとめた。

まず西部グループに属する Hemacandra はサンスクリット以外の言語として Ārṣa, Māgadhī, Śaurasenī, Paisācī, Cūlikāpaisācī, Apabhraṃśa の六つの名前を挙げている。同じく西部グループの Laṅkeśvara の文法書はタイトルに ṣaḍbhāṣā と掲げているが、その内訳は Mahārāṣṭrī, Śaurasenī, Māgadhī, Paisācī, Cūlikāpaisācī, Apabhraṃśa である。

それに対して東部グループの文法家たちが挙げる言語名は多い。まず Kramadīśvara は以下八つの言語名を挙げる。

Mahārāṣṭrī, Māgadhī, Ardhamāgadhī, Paisācī, Vṛācaḍa, Nāgara, Śābarī,
 Apabhraṃśa,

さらに注釈者 Jumarānandī は十二の言語名を加える

Upanāgara, Śaka, Ābhīra, Drāviḍa, Uḍra, Āvantya, Āvanti, Śrāvanti, Prācyā,

10 不詳

Śaurasena, Bāhlikī, Dākṣiṇātyā

Puruṣottama, Rāmaśarman, Mārkaṇḍeya の三人は Pkt. を Bhāṣā, Vibhāṣā, Apabhraṃśa, Paisācika の四つに分け、さらにその下位分類として多数の言語名を挙げる¹¹。例として前二者のみ示すが、これに後二者を加えるとおおむね三十前後の数になる。

Bhāṣā :

Pur : Mahārāṣṭrī, Śaurasenī, Prācyā, Āvantī, Māgadhi

Rām : Mahārāṣṭrī, Śaurasenī, Prācyā, Āvantī, Māgadhi, Ardhamāgadhi,
Dākṣiṇātyā

Mār : Mahārāṣṭrī, Śaurasenī, Prācyā, Āvantī, Māgadhi, (Dākṣiṇātyā)

Vibhāṣā :

Pur : Śākārī, Cāṇḍālī, Śābarī, Ṭakkī

Rām : Śākārīkī, Cāṇḍālīkā, Śābarī, Ṭakkī, Ābhīrikā,

Mār : Śākārī, Cāṇḍālī, Śābarī, Ṭakkī, Ābhīrī

言語の分類に関しては西部と東部では明らかに差があることがわかる。

6. ま と め

語彙の分類という発想自体は当然過去からあったと思われるが、Hemacandra は彼の時代までのプラークリット諸語、アパブランシャの書作品から現実に文語として用いられている由来が不確かな語彙を *deśī* として明確化した。また語彙だけではなく、文法についても始めてアパブランシャを取り上げ、また増大しつつあった主要な韻律もまとめ、当時の著作活動において必要な知識をまとめあげた。*Deśināmamālā* はあくまでもそういった活動の一環と捉えられる。

また後代への影響を考えると、彼の示した語彙区分はそのまま西インドを中心として引き継がれ、現代にまで至ったものと思われる。それに対して東インドでは *deśī*, *deśya* は「地方の言語」といった意味を持ち続け、実際の文法書でも語彙への言及よりも種々の言語についての言及が詳細になされている。こういった差の生じた原因を解明することはプラークリットやアパブランシャに

11 山畑 (2006)

よる文学の広がりをも明らかにする際にも重要なことと思われる。

参考文献

- Acharya, Krishna Chandra. 1966. *Mārkaṇḍeya's Prākṛta-Sarvasva*. Ahmedabad
- Banerjee, Satya Ranjan. 1980. *Samkṣiptasāragataḥ Prākṛtādhyāyaḥ*. Ahmedabad.
- Bhayani, Harivallabh Cunilal. 1988. *Studies in Deśya Prakrit*. Ahmedabad.
- _____. 1992. *Some Aspects of Deśya Prakrit*, SMT. Radha S. Katre Memorial Lectures (3rd and 4th series). Pune.
- Böhtlingk, Otto, Charles Rieu. 1847. *Hema'kandra's Abhidhānak'intāmaṇi*. St. Petersburg
- Bubeník, Vít. 1998. *A Historical Syntax of Late Middle Indo-Aryan (Aṣṭadhyāyī)*. Amsterdam
- Dośi, Becardās Jivraj. 1960. *Pāia-Lacchīnāmamālā*. Bombay.
- Ghosh, Manomohan. 1980. *Prākṛtakalpataṛu*. Ahmedabad.
- Krishna Chandra Acharya. 1968. *Prākṛta-Sarvasva*. Ahmedabad.
- Pāṇḍeya, Chanānanda and Jamārdana Joshi. 1929. *Anekārthasaṃgraha*. Benares.
- Pischel, Richard. 1900. *Der Prākṛit Sprachen*. Strassburg.
- _____. 1938. *Deśīnāmamālā of Hemacandra*. (2nd ed. 1989. Poona).
- Puṇyavijayajī. 1968. *Nighaṇṭuśeṣa*. Ahmedabad.
- Roy, Suchitra. 1998. *Reconstructed grammar of the Setubandha*. Calcutta.
- Trivedi, Rao Bahadur Kamalashan Shankar. 1916. *The Shaḍbhāṣhācandrikā of Lakṣmīdhara*. Bombay.
- Vaidya, P. L. 1954. *Prakrit Grammar of Trivikrama*. Sholapur : Jaina Saṃskṛti saṃrakṣaka saṃgha
- 山畑倫志. 2006. 「アパブランシヤ語の諸方言と分類」. 『印度哲学仏教学』. 北海道印度哲学仏教学会. 第21号. pp.84-98.

The Deśī and *Deśināmamālā* : the Development of an Etymological Classification

Tomoyuki YAMAHATA

The New Indo Aryan languages distinguish its vocabulary into tatsama, tadbhava, deśī, videśī from the point of etymology. Except for videśī, this classification should be popular in medieval period of India. This article focuses on *Deśināmamālā* of Hemacandra, Jain scholar in the 12th century. Hemacandra define the category of deśī clearly for the first time, while scholars referred to deśī indistinctly by then. Hemacandra attempted to organize the knowledge of Sanskrit, Prakrit and Apabhramsa in respect of vocabulary, grammar, and meter.

Western group of grammarians of medieval India depicted the classification of vocabulary after Hemacandra. Eastern group did not refer to that classification. This difference will be the key to solving problem how Prakrit literatures prevailed in north India.